

個展《絶滅種：僕たちが昭和に残した永遠》

国際ファッション専門職大学
今村 淳

本報告は、筆者が2022年2月16日～26日まで東京・南青山にあるギャラリーストークスで行った個展に関する報告である。本誌前号でも述べたが、今回個展を開催したギャラリーは、鈴木孝史（国際ファッション専門職大学教授）がマネージメントをしているギャラリーである。本個展《絶滅種：僕たちが昭和に残した永遠》では、筆者の幼少期であった昭和40年代後半が作品テーマになっている。今回取り上げた主なモチーフは、筆者が当時憧れていた乗り物たち、超音速旅客機コンコルド、イタリアのランボルギーニ社のスーパーカー（カウンタック、ミウラ、イオタ）、そして1972年よりテレビ作品としてスタートした『人造人間キカイダー』に登場する敵役ハカイダーが乗るバイク（カワサキ750ss）である。テレビや雑誌を通して目にするこれらの乗り物は、筆者にとってふれたりできるような身近な代物ではなかったが、当時の加速化する高度経済成長期の象徴として、子供ながらにそのリアリティを実感していた。

本個展の作品は、これまでの展示作品と同様に、長年筆者が制作研究してきた《Digital Image Painting》という美術作品シリーズの一環として制作された。この《Digital Image Painting》は、情報化社会における人間の生をテーマにしたシリーズ作品である。このテーマは本個展においても重要なコンセプトになっている。そこで、本個展用に作成したコンセプトペーパーを以下に記しておく。図1、写真1～3と併せて見ていただきたい。

北野武監督の映画に『TAKESHIS』（2005）という作品がある。そのタイトルから「タケシス」と揶揄されるようにその内容はかなり自虐的である。映画のなかで北野監督は二人の武を演じており、最後には一方の武がもう一方の武を殺すというまさしくタイトル通り「武死す」である。続く同監督の作品に『監督・ばんざい！』（2007）がある。制作に行き詰まった北野監督がみずからのルーツを紐解きながら模索を続けるが、最後には隕石が地球に落ちてきて登場人物全員が絶滅するというこれもまた壮絶な結末をもつ作品である。これら両作品は北野監督がみずからの芸術表現と世評との大きなギャップに悩んでいた時期に制作されたといわれる。ちなみに僕は両作品が好きである。正確にいうなら年々好きになっている。なぜなら、長い間絵画制作を続けてきたなかで、さまざまな局面において、みずからの感性が育まれた昭和という時代と現代とのギャップを年々感じているからである。

本作品《絶滅種》では、超音速旅客機コンコルドやV型12気筒エンジンを搭載したランボルギーニなどを描いている。昭和40年代生まれの僕にとって、それらは乗ったこともないはるか彼方の西洋のシロモノだったが、子供ながらに高度経済成長期を象徴する身近なものとして感じられた。その感覚は、毎日テレビや雑誌といったメディアからの情報を常食のようにむさぼり吸収していた

その時代から生みだされたといえる。そして、イタリアのフューチャリズムのごとく、スピードそのものを追求するある種のロマン性によって形成されたといえるだろう。最新の科学技術を駆使してプリミティブな欲求に邁進するそのロマン性（人類が繰り返すその物語性）は、SDGsを最重要課題に掲げる現代の世相とはまったく対極するものである（それはロマン性を追求したがゆえの結果だが...）。しかし、本作品はここで示唆したようなSDGsと対峙する姿勢を賛美するものではない。それは、僕自身を形成した時代について模索する行為から生まれた。そして、僕のカウンタックの絵を見て「虫のようだ」といった知人のコメントがその後押しをしてくれた。そう、それらはまさしく生きものだったのである。僕にとって、コンコルドもカウンタックも、子供の頃すでに貴重な生きものとして愛でていたカブトムシやクワガタと同等の存在だったのである。

前述の北野監督の作品は、昭和の漫才ブームの価値観をそのまま継承している。『TAKESHIS』でたびたび登場するクラシカルな漫才のかけ合いや、『監督・ばんざい！』での北野監督の少年期である昭和30年代をテーマにしたショートストーリーなどは、彼のなかで今も身近なリアリティとして息づいているに違いない。しかし、先述の「武死す」が揶揄するように、北野監督自身も絶滅種といえる存在なのではないだろうか。だが、絶滅種であろうとなかろうと現在を生きなければならない。その作品が絶滅種であろうとなかろうと生きものとして制作し続けなければならないのである。

そして僕は本作を制作した。みづからを形成するメディアとしてのコンコルドの上を愛でるように描く。その線は、時空を超え、まるでその像を生みだす下書

きであるかのように両者は交叉しながら共存する。ここで発生する調和（concorde）は、アートの世界なら、絶滅種であろうと未来を生き続ける可能性があることを示唆してくれるのだ。

本個展では前述の通り、コンコルド、ランボルギーニ社のスーパーカー、ハカイダーのバイクなどを描いた作品計15点を展示した。《Digital Image Painting》は、デジタルカメラやインターネットなどから得た画像をプリントアウトし、その上にその画像を油彩で「上描き」した作品である。この上描きは、「下描き」（あるいは「完成図」）を他者に委ね自己を主体とせず行う表現といえる。これをデジタル化された情報化社会における自己（人間）の生のあり様そのものとして、筆者はこの行為＝表現を続けている。今回の作品の「下描き」は、まさしく自己の生を形成したメディアの象徴であり、そして、その真っ赤な画面上を勢いよく走りまわる太くて濃いラインは、幼少期の筆者の血潮として、半世紀を経た今も筆者の体内に流れ続けている。昭和40年代後半という短い期間の中で、筆者の自己は、当時の情報群によって形成されたといっても過言ではない。

危機的な社会状況における芸術の存在とは何か。これは筆者が本誌前号で述べた問いである。2022年に勃発したロシアによるウクライナ侵攻や依然として続くコロナ禍などの現状を踏まえ、筆者はさらなる「表現＝人間の生」について制作研究を行う意義を感じている。この実践において、絶滅種であろうとなかろうと現在を生きなければならない。そして、その作品が絶滅種であろうとなかろうと生きものとして制作し表現し続けなければならないのである。

最後に、本学教員の方々および本学学生も含め来廊くださった皆様にお礼を申し上げておきたい。

個展《絶滅種：僕たちが昭和に残した永遠》



図1 《Endangered》紙に油彩、124×88cm、2021年



写真2 展示風景



写真1 展示風景

(すべて2022年2月16日今村撮影)



写真3 展示風景